



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol.124
環境資源としての六甲山
/三俣 学
2015年10月発行

第124回テーマ 六甲山の利活用を考える ～環境資源管理の議論から～

- G. ハーティンの論文から始まった資源管理の議論
- グローバル時代の資源・環境問題と「協治」という考え方
- 英国と北欧の自然アクセス制度

実施日：平成27年10月17日（土）
午前10時～15時45分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：三俣 学さんプロフィール
1971年（昭46）生まれ 年齢
43歳 ご出身地：愛知県
現在、兵庫県立大学経済学部教授。
その間、リヴァプール大学マクス
研究所客員研究員（英国）、エヴァー
グリーン大学交換教員派遣（米国）
を歴任。



イギリスのフットパス

秋晴れの自然歩道で22名がササ刈り

朝の記念碑台は快晴、自然体験会に22名が参加し、「散歩道」のササ刈りをしました。三俣先生とゼミ生3名も参加し、六甲山ホテル東までの約500mで三々五々に分かれて作業しました。

午後の講演に27名が参加しました。森づくりや山道整備の体験をテーマに結びつけて考えました。



ササ刈りに出発

三俣ゼミは下唐櫃村で林業も研究

三俣先生は県立大学に赴任して12年間ずっと、「卒業記念ウォーク」を続けておられます。森林植物園で禿げ山の展示コーナーを見て、森林が人間社会にとっていかに重要かを学ぶのです。北六甲の下唐櫃村でも桧林の間伐を体験し研究されています。本格的にフィールドワークを実践する経済学徒を養成されていることに感心します。今回は、「環境資源としての六甲山」というテーマで、「六甲山は誰のもの？」と投げかけて案内をしました。当日は、さらに焦点を絞って「六甲山の利活用を考える～環境資源管理の議論から～」の資料をご用意いただき、テーマと講演内容も修正しました。

資源管理の議論から、六甲山の利活用を考えたい

資源管理の議論の源流として、G. ハーティンの論文「コモンズ（共同地）の悲劇」を紹介されました。続いて、エリノア・オストロムがノーベル経済学賞を受賞した学説を上げて、「コモンズは悲劇に陥らない」と、「ローカルルール」の形成を説明されました。2つの理論を、甲賀の入会林野で実証研究され、「ローカルルール」の形成を確認されています。これら学術研究を背景に、「協治」の事例研究を進められ、イギリスと北欧の自然アクセス制度の調査をされています。

続いて、現地では撮影された写真を使って、興味深いエピソードを感動込めて話されました。イギリスの「歩く権利法」、フットパスの特徴を説明され、次は、スウェーデンの「万人

権（ばんにんけん）です。「私有地公用地を自由にアクセスする権利」が国の柱に据えられていること、「野外活動は自然における経験の活動を通じて、自然と魂がバランスを保つ生活様式だ」という哲学が根づいているとのこと。 「歩く権利法」や「万人権」は歴史の経験から紡ぎ出されています。日本の土地所有は「絶対排他的権利」で、アクセス権を広めるのが難しいという現実も知りました。



ブルーベリーを摘む女子大学生



ブルーベリー集めを商売にする

改めて「六甲山を使わなくちゃ、もったいない」

当会は当事者でない外縁の市民として、六甲山の新たな「便益」を探っていると理解できました。これまでの六甲山の「便益」が推移し変化するだろうと予見しました

※詳しくは2ページをお読みください。

参加の感想 柳川さん

今回のセミナーは、六甲山の活用という課題に対して、どう活用するのかという視点ではなく、活用していくためにはどのような課題があり、何が重要かという視点に立つものだと感じた。活用のためにはアクセスをしやすくすることは重要である。

しかし、その場合、欧州や英国のアクセス権の話にあったように問題が生じてくる。そのため、所有・利用・管理の在り方を改めて考えていくべきだと感じた。

また、当日の朝に行った笹刈り活動を通し、管理の大変さを身に染みて感じる事ができた。



【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、
コープこうべ環境基金、自然保護ボランティアファンド、
セブン-イレブン記念財団

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会